

## 介護観の分析からみた介護実習の効果評価研究

吉田 清子<sup>1</sup>・鈴木 聖子<sup>2</sup>・阿部 明子<sup>1</sup>・柏葉 英美<sup>1</sup>

An Evaluation of the Effectiveness of Caregiving Training Based on an Analysis of Students' Impressions of Training Topics

YOSHIDA Seiko<sup>1</sup>, SUZUKI Seiko<sup>2</sup>, ABE Akiko<sup>1</sup>, KASHIWABA Hidemi<sup>1</sup>

本研究は、介護福祉士養成教育における学生の実習後の介護観の分析を縦断的に行い、介護実習の効果評価を行うことを目的とした。結果、各年次に共通する介護観の視点として「実習についての感情・思い」「生活支援技術」「介護に関する価値」「利用者主体のケア」「実習の態度」「利用者像」「介護過程」「実習の場」の8カテゴリが抽出された。また3年次には「地域における多職種連携」4年次には「認知症利用者の理解」のカテゴリが追加抽出された。年次が進むに従い中位項目のサブカテゴリ、介護観を構成する知識、技術、態度ともに、より多様であり臨床場面に即していることから介護専門職としての成長を示唆しているといえる。

キーワード：介護観 介護課程の学生 介護実習 実習報告書

The purpose of this study was to evaluate the effectiveness of caregiving training based on a longitudinal analysis of students' impressions and comments regarding caregiving topics covered in their curriculum. All the students studied the following eight topics: "Emotions and thoughts on caregiving training," "Everyday living support techniques," "Values emphasized in caregiving," "User-centered caregiving," "Attitude towards caregiving training," "Image of care users," "The caregiving process," and "Facilities suited to caregiving training." An additional topic, "Multi-occupational cooperation in the community," was studied by 3rd year students and another, "Understanding users with dementia," was studied by 4th year students. As the students' progressed through their four years of training, the knowledge, techniques, and attitudes that were expressed in their comments and impressions regarding these topics became more varied and more adequately reflected the realities of the actual caregiving situation, indicating the students' growth as caregiving specialists.

Keywords: impressions of caregiving, students in caregiving programs, caregiving training, and training report

### I. 研究背景・目的

1987年（昭和62年）5月21日「社会福祉士及び介護福祉士法」の成立により介護福祉士の養成教育が始まった。介護福祉士養成は、当初1500時間以上の指定時間であったが、1999年（平成11年）の「福祉専門職の教育課程等に関する検討会報告書」で「期待される介護福祉士像」として、感性豊かな人間性と幅広い教養、意思疎通と信頼関係、家族・本人の状況把握と計

画実践・評価・修正、介護を必要とする人の人権尊重・自立支援、保健医療従事者との連携・協働、自己研鑽、後進の育成が示され、2000年（平成12年）に1650時間以上に改定された。その後、2007年（平成19年）に「社会福祉士及び介護福祉士法の一部を改正する法律」の可決により、1800時間の指定時間となり認知症の介護等従来の身体介護にとどまらない新たなサービスへの対応が明示され、定義・義務規定の変更に加え、新カ

<sup>1</sup> 岩手県立大学社会福祉学部

<sup>2</sup> 日本赤十字秋田看護大学看護学部

リキュラムとして「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」の3領域から構成された。その内容として「人間と社会」領域では、人間の尊厳、社会制度、「介護領域」は、介護の基本、生活支援技術、介護過程、「こころとからだのしくみ」では、発達と老化の理解、認知症の理解、障害の理解、医学概論などが示された。このように3領域に新カリキュラムが構成された主なねらいは介護福祉学の体系化を図ることであり、「介護」を展開するために必要な理論や知識として「人間と社会」「こころとからだのしくみ」が位置づけられた(川廷：2008)。

介護福祉士養成教育当初の1987年代の介護福祉士養成テキストを概観し、松本(2011)は「多くのテキストには、さまざまな介護観のモデルが展開されている。これらを見ると明確な介護福祉学として確立されたものでなかったことを読みとることができる。この初期におけるテキストの多くは、病院や医療分野で使われる看護手順要綱のようなものであり、介護の目標は、特に明確にされていなかった」と述べている。

新カリキュラムでは、介護過程の展開が必修化され、生活支援技術を展開する上で、個人の生活を背景とする目標を設定し、その目標に応じた生活支援技術はICFを用いて展開することが求められ、介護計画立案や生活支援技術提供における理論的なよりどころとして位置づけられた(鈴木：2007)。また、カリキュラム改正においては、「求められる介護福祉士象」として、(現場で必要とされる実践的能力、これからの介護ニーズ・政策への対応、施設・在宅を通じた汎用性ある能力、心理的・社会的支援の重視)等が示され、高い倫理性、自立支援、個別ケアの実践、施設から在宅まで支援できる総合能力や多職種協働によるチームケアなど高い専門職性が求められた。

次に、介護福祉士養成教育における介護実習は中核的な位置づけにあり、理論と実践の統合、介護観の育成が目的とされる。実習の時間数は450時間を占め、実習施設は、実習要綱を備えており実習指導教育を受けた介護福祉士が勤務する施設など、実習指定を受けた施設に限られている。

学生は、学校で学んだ知識や技術を用いて実習指導者や教員の助言に従い実習プログラムに基づく実習を通して知識と技術が統合され、学生の介護観が形成される(阿部ら：2014)。

上記のように介護福祉学の体系化が意図された新カ

リキュラムが施行され6年が経過し、すでに新カリキュラムで学んだ卒業生が送り出されている。

新カリキュラム以降の介護観の研究について石田ら(2011)、鴻上ら(2014)が報告しているが、その数は少なく、今後の研究の蓄積が求められる。これまでの介護観に関する研究も、30件(CiNiiによる検索)と少ないが、介護観を背景とした生活支援技術の展開では武田(2011)の研究が参考となる。

また、介護福祉士教育の関連分野とされる看護教育から富田ら(2003)、張ら(2012)の「看護観」の分析方法を参考にすることができる。しかし、新カリキュラムにより学んだ学生の教育評価に関する研究は殆ど見られない。

新カリキュラムで学んだ学生の「介護観」に注目し、その推移を見ることは、新カリキュラムに対するある側面からの評価と考えることができる。そこで、本研究では、実習経験に基づく介護観について、縦断的に分析を行い、実習の効果評価を行うことを目的とした。

本論文に定義する介護観とは、介護福祉士の職業倫理・行動規範の原型であり、対象者との関係性において成し遂げられるものであると考えられ、具体的には「ケアの方向性・考え方」だけでなく働き方や仕事への取り組み方を含むものとしてとらえ「介護職員が介護の仕事に取り組む際によって立つ価値観及び態度」とした(白石：2010)。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象

対象学生は、新カリキュラムで学んだ平成21年度入学、平成24年度卒業生で介護福祉士課程登録者10名である。

分析は、実習を通しての介護観(知識、価値観、態度)が表出すると考えられる対象学生の各年次(2年次、3年次、4年次)の実習報告書とした。

### 2. 研究期間

2012年12月26日～2014年11月末

### 3. 分析方法

実習報告書10名分、3年間の全文章をエクセル表にまとめた。エクセル表から介護観についての記述が見られる内容を抜粋し分析した。介護観を抽出する視点として、介護の価値観、介護の態度、利用者との関係

が記述されていると考えられる文章を抽出した。抽出した文章を1文1意味としてカードに記載した。カードは素データとして活かせるように、全てに番号を表示し、カードの文脈や類似性にそって、集合化し、集合した文章にラベル付けをした。

ラベル付けをした概念を下位概念とし、その上に中位概念としてのサブカテゴリ、上位概念としてのカテゴリを作成し3年間の介護観一覧表にして変化の推移をみた。

さらに、ラベルを説明する素データ（カード）に立ち戻り、介護観の推移が明確に表現されている実習態

度、利用者像、介護過程、介護に関する価値の4カテゴリを選択し、学生4名の個別的推移を図式化した。

分析は、介護福祉学を専門分野とする4名の研究者で行い、信頼性妥当性を担保した。

#### 4. 倫理的配慮

同意を得た10名の実習報告書を分析対象とした。同意を得た10名には、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと、匿名性を保ち、結果から個人が特定されないようにプライバシーの保護を明示し、公表には了解を得た。

表1 各年次における介護観の推移

学年	カテゴリ	サブカテゴリ	内容
2年次	1. 実習についての感情・思い	利用者との関係性の構築にともなう実習の楽しさ 利用者との相互関係にともなう実習の困難さ	実習の楽しさ 実習に関する否定的感情
	2. 生活支援技術	利用者との関係性の構築のための方法 利用者理解におけるケアへの気持ちや配慮 生活支援技術の方法	利用者への声かけ、相手に合わせた介助 ケアに対する気持ちや配慮 排泄の工夫、利用者に寄り添う、入浴介助、食事介助、移乗、体調の理解
	3. 介護に関する価値	利用者の個性を重視した支援	介護の価値
	4. 利用者主体のケア	利用者の潜在能力を引き出すケア	自発性を引き出す、入居者との関係性
	5. 実習の態度	利用者との時間を共有する 実習になれること	利用者を大切に、時間の感じ方、実習の基本的態度、利用者との向き合い方 実習への順応性
	6. 利用者像	利用者の特性や存在感	利用者像、高齢者の存在感
	7. 介護過程	介護過程の展開方法	その人自身のこと、情報の大切さ
	8. 実習の場	施設種別 リスクマネジメント	従来型の利点 リスクマネジメント
3年次	1. 実習についての感情・思い	実習を通して得られた達成感や課題	実習に対する態度、その他、ケアからうける達成感、実習に対する感情
	2. 生活支援技術	利用者との関係性の構築のための方法 利用者理解におけるケアへの気持ちや配慮 生活支援技術の方法	コミュニケーション 利用者と寄り添う 移乗
	3. 介護に関する価値	利用者の自立を支援する	自立支援、介護の価値
	4. 利用者主体のケア	利用者の潜在能力を引き出すケア	利用者の生き甲斐、利用者に合った介助、行動の意味を知る
	5. 実習の態度	利用者との関係性構築における向き合い方	利用者への向き合い方
	6. 利用者像	利用者の特性や存在感	利用者の特性を知る、高齢者の存在感
	7. 介護過程	介護過程の展開方法	相手の立場
	8. 実習の場	施設種別、リスクマネジメント	リスクマネジメント、従来型の利点
	9. 地域における多職種連携	地域における多職種連携の意義	多職種連携、地域での生活支援、家族へのケア
4年次	1. 実習についての感情・思い	実習を通して得られた達成感や課題、学び 目指す介護福祉士像	実習への感謝、実習の学び、実習における課題 福祉を目指した理由、目指す介護福祉士
	2. 生活支援技術	利用者との関係性の構築のための方法 利用者理解におけるケアへの気持ちや配慮 生活支援技術の方法	信頼関係、家族支援 利用者の立場に立つ、利用者と寄り添う 一緒に支援する、多様な支援方法
	3. 介護に関する価値	根拠のある利用者主体の介護	介護の価値
	4. 利用者主体のケア	利用者の潜在能力を引き出すケア	介護の視点、入所理由、機能維持
	5. 実習の態度	利用者との関係性構築における向き合い方	実習に対する姿勢、ケアに対する気持ち、相手に合わせた介護、緊張
	6. 利用者像	利用者の特性や存在感	利用者像
	7. 介護過程	介護過程の展開方法	ケアプラン、介護計画、資源の活用、家族との関係
	8. 実習の場	施設種別、リスクマネジメント	リスクマネジメント、施設の特徴、従来型の利点
	9. 認知症利用者の理解	認知症の人の理解を踏まえたケア	認知症への理解

### Ⅲ. 結果

#### 1. 対象学生の全体的推移

表1は平成21年度入学の2年次、3年次、4年次における介護実習後の「実習報告書」に記述されている介護観の推移についての一覧表である。

2年次ではカテゴリ8項目、3年次9項目、4年次9項目であった。その中で「実習についての感情・思い」、「生活支援技術」、「介護に関する価値」、「利用者主体のケア」、「実習の態度」、「利用者像」、「介護過程」、「実習の場」の8項目が各年次に共通する項目であった。

また、3年次と4年次は9項目であったが、3年次は「地域における多職種連携」が、4年次には「認知症利用者の理解」が追加されていた。

カテゴリにおいては、上記のように各年次の大きな違いは見られないが、サブカテゴリ、内容との関連から年次ごとの介護観の推移を比較することができた。カテゴリ1の「実習についての感情・思い」については、サブカテゴリ及び内容を見ると、2年次に利用者との関係性構築に伴う実習の楽しさについての記述が見られるものの、他の年次では見られない実習対

る否定的な感情が記述されていた。3年次及び4年次の場合には実習を通して得られた達成感や課題について記述しており、年次が進むにつれて、実習の経験を自己の達成感として統合化（抽象化）していた。また、4年次の場合、目指す介護福祉士像についての記述が見られ、将来を見据えながら実習に臨んでいることが窺えた。

カテゴリ2の「生活支援技術」であるがどの年次においてもサブカテゴリでは、利用者との関係性構築のための方法、利用者理解におけるケアの気持ちや配慮、生活支援技術の方法をあげることができた。しかし具体的な記述内容を見ると、2年次は主として、排泄の工夫、入浴介助、食事介助など具体的な生活支援技術の内容があげられていたが、3年次は利用者との寄り添い、コミュニケーション、4年次は信頼関係、家族支援、利用者の立場に立つ、多様な支援方法などが記述されており、生活支援の技術項目ではなく、支援にあたっての利用者主体の価値観や家族支援など、支援の範囲、考え方の拡大が見られた。

カテゴリ3の「介護に関する価値」である。2年次では利用者の個性重視、3年次は利用者の自立支援、4年次は根拠のある利用者主体の介護であった。

カテゴリ4の「利用者主体のケア」については各年次ともに利用者の潜在能力を引き出すケアが記述されていたが、その内容を見ると2年次は自発性を引き出す、3年次は利用者のニーズ、4年次は介護の視点と年次が進むにしたがい、より介護の専門性を意識したケアへの取り組みととらえた。

カテゴリ5の「実習の態度」では、2年次はサブカテゴリに利用者の時間との共有、実習になれることをあげているが、3年次と4年次の場合には利用者との関係性構築における向き合い方があげられており、年次が進むに従い利用者との関係性構築をより意識した関わりを行っていた。

カテゴリ6の「利用者像」では2年次、3年次、4年次ともに利用者の特性と存在感をあげており、大きな違いは見られなかった。

カテゴリ7の「介護過程」であるが2年次は情報について、3年次は利用者の立場、4年次は資源の活用、介護計画、家族との関係を記述しており利用者サービスにおける現実的な内容を広い視点からより意識しながら実習していたことが伺えた。

カテゴリ8の「実習の場」であるが各年次ともサブ

カテゴリに施設種別、リスクマネジメントをあげており、2年次と3年次は従来型特養の利点について記述していた。4年次の場合にはさらに、施設の特徴についても記述していた。

次に3年次のみ記述していたカテゴリ9の「地域における多職種連携」である。ここでは、地域での生活支援や家族へのケアについて記述しており、利用者の生活の場が施設から地域への移行、さらに多職種連携の意義を認識しているものと考えた。

4年次のみあげていた「認知症利用者の理解」である。実習を通して、常に利用者として関わる認知症の利用者については、さらなる理解の必要性を認識しているととらえた。

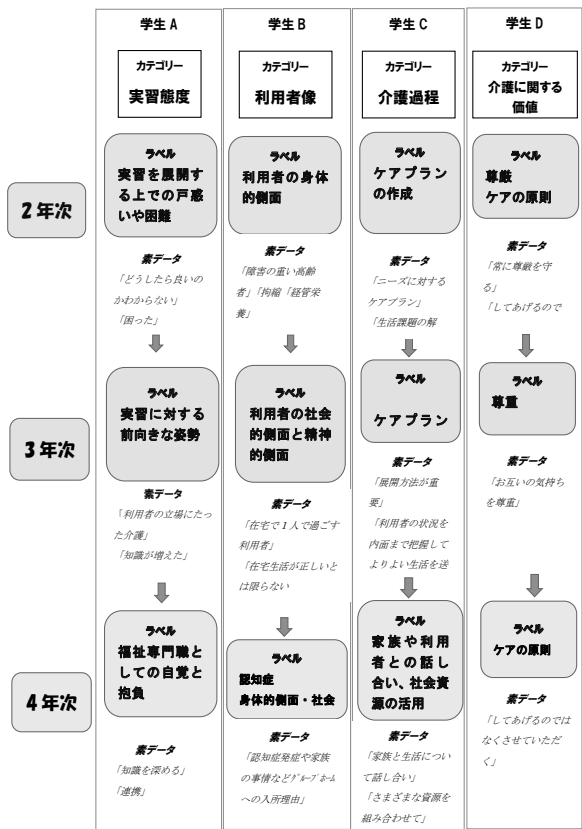


図1 学年個別の介護観の推移

## 2. 学生個別の介護観の推移

学生の介護観について年次毎の推移が顕著にあらわれている4カテゴリ（実習の態度、利用者像、介護過程、介護に関する価値）を抜粋し説明する（図1）。なお、年次による介護観の推移については、それぞれのカテゴリは同一実習生の個別の推移である。

### (1) 実習態度

2年次では「学校で介護技術はある程度勉強してわ

かっているつもりであったが、利用者を前にするとどうしていいかわからなくなった「麻痺や拘縮の強い方も多くどのように動かしていいかわかってしまった」など実習を展開するうえでの戸惑いや困難感などネガティブな感情の表出があった。

3年次では「これからは、さらにその知識を深め、利用者の立場に立った介護とは何かを考えていきたい」「講義や実習する前に比べると明らかに高齢者や障害者、そして介護についての知識が増えた」など既習の学習と実習での実践を結びつけさらに知識や技術を深化させようという、実習に対する前向きな姿勢が記述されていた。

4年次では「今後も自分自身で知識を深めながら福祉の現場にいる人々と技術や情報の共有、利用者を支援するために連携することの実践を行っていきたい」という、福祉専門職としての自覚と抱負が述べられていた。

## (2) 利用者像

2年次では「障害が重い高齢者」「予想以上に拘縮が強い」「経管栄養の利用者が多い」など、利用者の身体的側面を主とする記述であった。

3年次では「在宅では1人で過ごす利用者が増える」「むやみに在宅生活をを進めることはできない」「在宅生活が正しいとは言えない」など、利用者の社会的側面や精神的側面を主体とする記述であった。

4年次では「認知症の発症や家族の事情などさまざまな理由からグループホームに入所している」「グループホームで生活する意味、理由を考えた時、本人の意思で入所に至った人は少ないはず」など、家族を含む認知症の人を取りまく環境も視野においた総合的な利用者像が記述されていた。

## (3) 介護過程

2年次では「介護者側からみたニーズに対するプラン」「生活課題の解決を目的とするプラン」など、ケアプラン作成に着目した記述であった。

3年次では「どのように解決していくかという展開方法がとても重要」「利用者の状況を内面まで把握しよりよい生活を送ってもらう」などケアプランの実践に着目した記述であった。

4年次では「家族の考えや面接の際の発言などを参考に利用者の今後の生活について話し合うこともよりよいケアプランの作成に役立つ」「さまざまな資源を組み合わせる支援の展開方法を見出すのは私たちの腕の

みせどころ」など、家族の存在や、利用者との話し合い、社会資源の活用についての記述であった。

## (4) 介護に関する価値

2年次では「常に尊厳を守る」「してあげるのではなくさせていただく」、3年次では「お互いの気持ちを尊重」、4年次では「してあげるのではなくさせていただく」など、尊厳とケアの原則について述べられており、記述内容についての変化の推移は殆どみられなかった。

## IV 考察

2年次から4年次までの3年間にわたって実施した450時間の実習を通して、学生の介護観の形成と推移について、結果で得られたカテゴリに基づいて考察する。

### 1. 実習についての感情・思い

2年次の初めての实習では、「否定的感情」が記述されていたがその理由として、実習に臨むレディネスの不充足さがあげられる。2年次は、実習経験がないことからさまざまな課題について、解決の糸口が見いだせないことによる焦りや、学内で学んだ学習は限られており、必要な知識を十分に身につけて実習に臨んでいるとは言えない不安が大きいことがあげられる。このことは「利用者を目の前にしてどう動けばいいかわからない」「どう動かしたらいいかわからない」などの記述にあらわれており、その人をどう理解するかよりも、どう支援しようかという支援方法の把握が優先していることを示している。実習場面で学生がさまざまな感情を経験することは、専門職として成長する過程において意義があると言える。

森村(2000)が述べているように、このような経験を積むことで、自分自身が「傷つきやすい存在」であることを認識し、「自己自身をケア」することを通じて「ケアすることへの感性を磨く」ことにつながり、介護職を目指す学生にとっての貴重な体験になるのではないだろうか。また、3年次になると「相手の立場に立った介護」を考え、4年次になると「福祉現場にいる人との技術や情報の共有、利用者を支援するための連携」と利用者個人の暮らしを支えるチームの一員という考えが生まれてくる。

このことは、実習に続く実習後の振り返りを重視したカリキュラム内容と学生が実習で経験した事例を用

いた授業方法の成果と捉えることができる。

## 2. 生活支援技術

各年次においてサブカテゴリでは、利用者との関係構築のための方法、利用者理解におけるケアの気持ちや配慮、生活支援技術の方法を共通項目としてあげていた。しかし、その内容を見ると2年次には体位変換・入浴・移動支援など具体的生活支援があげられ、3年次は、利用者との寄り添い、コミュニケーション、4年次になると、信頼関係、家族支援、利用者へ寄り添うなど年次が進むに従い身体的ケアに特化しない、広く多様な支援方法が述べられるようになっていた。このことは、実習ガイダンスで学ぶ実習目標に関連するが本来、生活支援技術は黒澤（2010）が述べるように、人間への畏敬を土台とする介護福祉士専門職の判断・理解・計画に基づいた支援の体系であると言え、年次が進むごとに生活支援術が単なる介助を超えた利用者の暮らしを支える技術として捉え直していった結果であると考えられる。

## 3. 介護に関する価値

介護に関する価値について、各年次におけるサブカテゴリでは2年次「利用者の個別性を重視した支援」3年次「利用者の自立を支援する」4年次「根拠のある利用者主体の介護」と推移しており、2年次から4年次にわたる実習や学内での学びの積み重ねが個々の学生の中に培われていると考えられる。

## 4. 利用者主体のケア

サブカテゴリは各年次共通の「利用者の潜在能力を引き出すケア」としてあげられていた。しかし潜在能力の引き出し方や内容については各年次の違いが見られ、2年次は自発性を引き出す、3年次では利用者の生きがい・行動の意味を知る、4年次には介護の視点・機能維持などと推移しており学年が進むにつれて抽象的な表現からより具体的な表現に変化していた。利用者主体のケアについては実習の場で初めて経験できる学びであり実習経験を通して学生自身の中で具体化されていったものと考えられる。

## 5. 実習の態度

2年次は、利用者との時間の共有、実習に慣れることをあげているが、3年次と4年次の場合、利用者

との関係性構築における向き合い方をあげており、学年が進むにつれて利用者との関係性構築をより意識した関わりを行っていると考えられる。

実習当初は学生が自己に思いが向きやすいが実習回数を重ねるごとに、利用者との相互関係構築を意図した実習に移行したことを示していることが窺える。このことは、実習記録の課題として位置づけている利用者との関わりの再構成や実習中のグループスタディなど、実習期間を通じた記録や実習後に学内で行う役割モデル演習なども影響しているのではないかと考える。

## 6. 利用者像

各年次における違いは殆ど見られなかったが学生個別の利用者像の具体的な推移を見ると、2年次では「障害が重い高齢者」「予想以上に拘縮が強い」「経管栄養の利用者が多い」など、利用者の身体的側面を主とする記述であった。3年次では「在宅では1人で過ごす利用者が増える」「むやみに在宅生活をを進めることはできない」「在宅生活が正しいとは言えない」など、利用者の社会的側面や精神的側面を主体とする記述であった。4年次では「認知症の発症や家族の事情などさまざまな理由からグループホームに入所している」「グループホームで生活する意味、理由を考えた時、本人の意思で入所に至った人は少ないはず」など、家族を含む認知症の人を取りまく環境も視野においた総合的な利用者像が記述されていた。

このような推移は、介護過程展開において利用者により多面的視点から把握できることにつながると考えられる。

## 7. 介護過程

2年次では「介護者が側からみたニーズに対するプラン」「生活課題の解決を目的とするプラン」など、ケアプラン作成に着目した記述あり、3年次では「どのように解決していくかと言う展開方法がとても重要」「利用者の状況を内面まで把握しよりよい生活を送ってもらう」などケアプランの実践に着目した記述であった。4年次では「家族の考えや面接の際の発言などを参考に利用者の今後の生活について話し合うこともよりよいケアプランの作成に役立つ」「さまざまな資源を組み合わせて支援の展開方法を見出すのは私たちの腕のみせどころ」など、家族の存在や、利用者との話し合い、社会資源の活用についての記述があった。こ

のことは、上記の利用者像と同様に学年が進むに従い多面的視点からの介護過程展開につながるものと考えられる。

## 8. 実習の場

ケアを提供する場の違いは、介護の安全や提供方法に大きな影響を与えていることが予測され、各学年ともに施設種別、リスクマネジメントについて述べ、2年生と3年生は従来型特養の利点について、4年生では施設の特徴について記述していた。

3年次のみ「地域における多職種連携」4年生のみ「認知症利用者の理解」も対象実習施設や実習目標を反映したものであり、実習目標との関連において学んでほしい項目が記述していたことになる。

## V 結論

介護観の分析から各年次共通の視点として「実習についての感情・思い」「生活支援技術」「介護に関する価値」「利用者主体のケア」「実習の態度」「利用者像」「介護過程」「実習の場」の8カテゴリ、3年次「地域における多職種連携」4年次「認知症利用者の理解」のカテゴリが追加抽出された。

このようなカテゴリが抽出された背景には、新カリキュラムが目指す介護福祉士教育養成教育の系統的教育方法とともに、意図的に実習後の振り返りを含めたカリキュラム設定や、実習指導者との連携を重視した授業方法が学生の成長に関わっていることが示唆された。

## VI 研究の限界・謝辞

今回、介護実習から見た介護観の分析を行ったが今後、介護福祉士養成課程全体を視野においた新カリキュラムの効果評価研究が求められる。しかし、本研究は10名の学生を対象とした縦断的研究であること、新カリキュラムで学んだ最初の卒業生の介護観分析という面でのオリジナル性は担保できると考える。

実習施設の皆様、本研究に快諾いただきました卒業生には深く感謝するとともに御礼申し上げます。

## 引用文献

阿部明子、吉田清子、柏葉英美 2014 岩手県立大学実習ガイドブック 岩手県立大学社会福祉学部実習開発室

石田京子、小田史、田中真佐恵、鴻上圭太、上山百合、山田義秀 2011 短期大学における介護学生の卒業時の介護観の検討－授業・実習との関連と新カリキュラムへの課題－ 大阪健康福祉短期大学紀要第10巻3-14

川延宗之編 2008 介護福祉教育方法論 弘文堂

黒澤貞夫 2010 人間科学的生活支援論 ミネルヴァ書房

鴻上圭太、石田京子、辻本乃里子（他） 2014 新カリキュラムの効果と課題：短期大学における介護学生の卒業時の介護観の検討（続報） 大阪健康福祉短期大学紀要 第12-13巻 23-32

白石句子・大塚武則・影山優子・藤井賢一郎・今井幸充 2010 介護老人福祉施設の介護職員の「介護観」に関する研究－経験年数・教育・資格による相違－ 介護福祉学 第17巻2号 164-175

鈴木聖子 2007 ICFをとり入れた介護過程の展開 黒澤貞夫編著 建帛社

武田啓子、高木直美 2011 生活支援技術項目と卒業時到達度に関する研究 介護福祉学第18巻2号 122-135

張平平、田中敦子、大塚真理子、丸山優、善生まり子、飯島加奈子 2012 看護学生の感想レポート分析からみた元気高齢者による講義の意義 老年看護学 第16巻2号 86-94

富田幸江、小林たつ子、寺田あゆみ 2003 基礎看護学臨地実習Iで捉えた看護学生の介護観に関する検討－看護観レポートの分析－山梨県立看護大学短期大学部紀要 第9巻第1号 61-73

松本好生 2011 これからの介護現場に求められる介護福祉士の専門性とその教育の在り方 介護福祉教育 第16巻第2号 2-11

森村修 2003 ケアの倫理 大修館書店

## 参考文献

社団法人日本介護福祉士会編 2012 介護実習指導者テキスト 社会福祉法人全国社会福祉協議会  
山浦晴男 2012 質的統合法入門－考え方と手順－ 医学書院